

(1) 塔の上 (pp. 11-23)

「われは神の祭壇に昇らん」—髭剃り用のシャボンを泡立てた丸い器を携えるバック・マリガンが、マーテロ塔の頂上に現れることから『ユリシーズ』の一日ははじまる。彼に呼ばれて、この物語の主人公の一人スティーヴン・デダラスが眠たげな様子で現われる。彼の不機嫌は、塔に一時滞在をしているマリガンの友人、オックスフォード出身のイギリス人ヘインズが、前夜、黒豹に襲われる悪夢にうなされて讒言を叫び回ったことだけが原因ではない。母が亡くなってから最初にマリガンの家を訪れたときに受けた侮辱を、スティーヴンはいまだに根に持っている。医学生のカリガンは言う—「ああ、デダラスさ、おふくろが畜生みたいに死にしまったやつだよ」（p.19）。マリガンが悩める喪中の青年に見るように促す、マーテロ塔を取り囲む海（「湾と水平線の輪が鈍い緑の液体のかたまりを抱える」[p.15]）は、皮肉にも、肺病に冒され今わの際にあったスティーヴンの母が吐き出す胆汁の緑色を想起させる。彼女は亡霊となって、スティーヴンの夢の中で黙ったまま、彼が臨終の祈りを拒否したこと、すなわちカトリックの信仰を喪失したことを責め立てる。棄教と母の死は、スティーヴンと若き日の作者ジョイス（1904年においてともに22歳）を結びつけるのに充分であろう（のちに第17挿話で読者は、スティーヴンの母メイが、1903年6月26日に埋葬されていることを知る。作者自身の母もまた1903年の8月13日に肝臓がんで死去している）。

**(2) 塔の中 (pp. 23-34)**

塔の中で若者三人が、紅茶と共にベーコンエッグとパンを食べているところに、ミルク売りの老婆がやって来る。医学生のカリガンやアイルランド語を話すヘインズに対して、おもねるような素振りを見せる老婆にスティーヴンはアイルランドの象徴を見て取る。彼が言った「僕のひび割れた鏡がアイルランド芸術の象徴」という警句をヘインズは褒めそやすが、スティーヴンは彼に対し好意的な態度を取ることができない。マリガンとヘインズは海水浴へ（ただし泳ぐのはマリガンのみ）、スティーヴンは勤務先の学校へ向かうため、鍵を持って塔の外へ出てゆく。

**(3) 塔の外 (pp. 34-45)**

ヘインズはスティーヴンのハムレット論に興味を示すが、マリガンは酒が入ってからでないと彼の口は開かないと言う（挿話の最後で、彼らは12時半に「舟」というパブで落ち合う約束を交わす）。マリガンが泳ぐ準備をする中、ヘインズとスティーヴンは信仰や神、自由思想について短い議論を交わす。スティーヴンが「ぼくは二人の主人〔大英帝国とローマ・カトリック教会〕に仕えるでね」と言うと、ヘインズは「アイルランド人というのはきつとそういうふうにいるんだらう。……歴史に罪があるようだね」と返答し、「ぼくだって自分の国がドイツ系ユダヤ人の手に落ちるなんてのを見たくはない」と述べる（pp. 40-41；第2挿話では「歴史」が主たるモチーフとなる）。去り際に、スティーヴンはマリガンに塔の鍵を渡し、今夜はもうここには戻るまい、と考える。海を泳ぎながら戯れに呼びかけるマリガンの声に対して、スティーヴンが心の中で呟く「篡奪者め」というセリフは、スティーヴンとハムレット王子の間テクスト性を指し示すだけでなく、僕／召使い／使者という隷属的な地位に置かれていたカトリック・アイリッシュの歴史的不遇をも示唆する。



*写真は2枚目を除き、小林が2019年7月27日に撮影。2枚目の写真は、James Joyce Tower & Museumのウェブサイトより（<http://www.joycetower.ie/gallery/joyce-tower-gallery/>）。